

## 審査の結果の要旨

氏名： 李 相倫

本研究はボランティア活動が3年後の健康状態の予測要因であるかを検討し、さらにボランティアの活動時間が健康に与える影響を明らかにするため、日本の都市部に居住する高齢者を対象とし、3年間の追跡研究を行ったものである。具体的な目的は、1. ボランティア活動が主観的健康感、活動能力（老研式活動能力指標）および主観的幸福感（PGC モラール・スケール）に与える影響、2. ボランティアの活動時間と健康状態の関係を探索的に検討の2点である。なお、仮説として、「仮説1. ボランティア活動への参加は高齢者の健康と正の関係がある。すなわち、活動に参加することは初回の他の生産的活動や健康状態の影響を制御しても、高齢者の健康を維持・改善し、健康状態の悪化を抑制する。仮説2. ボランティアの活動時間による高齢者の健康への影響は、線形関係 (linear) であるが、ある程度の従事量を過ぎると曲線的变化 (curvilinear) がみられる。すなわち、ボランティアを行ったある程度の活動時間までは健康に正の効果があり、健康状態を維持または向上させる。しかし、一定の活動時間を過ぎると健康に対する影響の仕方が弱まる。」を設定し、下記の結果を得ている。

1. 初回調査（以下、W1）の時点で、ボランティア活動に参加していると答えた人（以下、活動者群）は27.2%であった。W1から追跡調査（以下、W2）時にボランティア活動を継続していた人は77.9%に対し、活動を中止した人は22.1%であった。また、活動を開始した人は12.9%に対し、活動を全くしていない未経験の人は87.1%であった。

W1時のボランティア活動の有無とW1およびW2時の健康指標との比較を行った結果、活動者群は活動をしていない人（以下、非活動者群）に比べ、W1、W2両時点での主観的健康感、活動能力が有意に高かった。なお、活動者群ではW1時よりW2時、主観的健康感と活動能力が維持されていることに対し、非活動者群では有意に低下する傾向が見られた。主観的幸福感における有意差はみられなかった。

2. W2時の主観的健康感を従属変数とし、W1の家事、介護、趣味・学習活動、就労（以下、他の生産的活動）、主観的健康感、性、年齢、世帯類型、経済状況、学歴を制御し、一変量分散分析によるパラメーター推定値を算出した結果、女性で、W1時に趣味・学習活動をしていた人ほど、主観的健康感が高かった人ほど、W2の主観的健康感が高い傾向がみられた。ボランティア活動では、活動者群が非活動者群に比べて主観的健康感が高かった。活動時間の場合、35.8時間（第1三分位値）超の活動をしていた人は、非活動者群と比べて主観的健康感が高く、活動時間

が長いほど、緩やかな上昇傾向が確認された。

3. W2 時の活動能力を従属変数として W1 の他の生産的活動、活動能力、性、年齢、世帯類型、経済状況、学歴を制御し、一変量分散分析によるパラメーター推定値を算出した結果、W1 時に年齢が若く、趣味・学習活動をしていた人ほど、また活動能力が高かった人ほど、W2 の日常生活の活動能力が高い傾向がみられた。ボランティア活動では、活動者群は非活動者群に比べて日常生活の活動能力が高かった。活動時間の場合、90 時間（第 2 三分位値）超の活動をしていた人は非活動者群と比べて、日常生活の活動能力が高く、活動時間が長いほど、緩やかに上昇する傾向が確認された。

4. W2 時の主観的幸福感を従属変数として W1 の他の生産的活動、主観的幸福感、性、年齢、世帯類型、経済状況、学歴を制御し、一変量分散分析によるパラメーター推定値を算出した結果、W1 調査時の主観的幸福感のみ W2 調査時の主観的幸福感と有意な差がみられた。

5. 健康に有効である適切なボランティア活動時間を探るため、追跡調査時の健康状態における予測値を算出した上で、ボランティア活動時間との検討を行った。その結果、非活動者に比べて、年間 52 時間（週 1 時間）超のボランティア活動を行う人で、主観的健康感が高いことが確認された。日常生活における活動能力でも同様な結果が得られたが、主観的幸福感では有意差が認められなかった。

以上、本論文は日本の都市部の高齢者を対象とし、ボランティア活動への参加および活動時間が高齢者の心身の健康に与える効果について、3 年間の追跡研究から、ボランティア活動と健康では正の関連があること、活動時間とは曲線的変化であり、年間 52 時間（週 1 時間）超の活動が有効であることを明らかにした。本研究はボランティア活動や社会参加が活動者自身の健康にどのような影響を与えるか、その意義を示す上で有益な基礎研究であり、高齢者に対する社会参加の一環としてのボランティア活動を推進するにあたって、一定の科学的根拠を与えたと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。